

五木寛之

流されゆく日々
(抄)

一九八八～一九九五年

講談社

五木寛之

流されゆく日々
(抄)

一九八八～一九九五年

講談社

なが
流されゆく日々 (抄) 一九八八—一九九五年
一九九五年七月二日 第一刷発行

著 者 五木寛之

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二—二

郵便番号 一一二—〇一

電 話 編集部 〇三—五三九五—三五〇五

販売部 〇三—五三九五—三六二二

製作部 〇三—五三九五—三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えいたし
ます。なお、この本についてのお問い合わせ
は、文芸図書第二出版部あてにお願いいたしま
す。本書の無断複写（コピー）は著作権法上で
の例外を除き、禁じられています。

© Hiroyuki Iwasaki 1995 Printed in Japan

●目次

1988年(昭和63年)

レニングラード冬景色 10

鴨長明と現代の暮し方 28

今年の夏も元気で鈴鹿 36

ミラノ・スカラ座の奇蹟 41

斑鳩の里に秋たけて 49

網走セントラルホテル 53

1989年(昭和64年・平成元年)

永平寺から吉崎御坊へ 59

与論島でニックと歌う 65

〈対治〉と〈同治〉の世界観 68

能登はやさしや雨模様 74

夏はやっぱり鈴鹿の八耐 77

博多から筑豊への旅 84

鈴鹿・江差に秋たけて 88

風に吹かれに江差まで 94

河内飛鳥から高野山へ 101

1990年(平成2年)

平成の枯れアワダチ草 105

齋藤愼爾さんへの挨拶 111

難民キャンプでの生活 115

信玄・金丸・ミレーの街 119

ザメンホフの故郷の街 124

四国路に夏たけなわ 130

1991年(平成3年)

反ユダヤ主義のゆくえ 136

五十嵐一氏の本を読む 143

虫明亜呂無と寺山修司 148

ドイツ的なるものの謎 152

今年の夏も鈴鹿です 159

夏の列島駆けある記 162

『クレヨン島の島』に三重丸 167

予測不可能な時代に 174

ロシア歌謡の二〇〇年 179

秋ふかし北陸路の休日 184

ウテ・レンパーを聴く 189

1992年(平成4年)

脳死でヒトは死ねるか 194

連載四〇〇回を迎えて 198

「隠れ」と「隠し」の宗脈 202

続・「隠れ」と「隠し」の宗脈 205

鈴鹿・八耐セミしぐれ 207

続・鈴鹿・八耐セミしぐれ 209

R・アベドンと一夜 211

追悼・太地喜和子讃 214

続・追悼・太地喜和子讃 218

湾岸戦争の勝者は誰か? 221

続・湾岸戦争の勝者は誰か? 223

'92年もかくて暮れゆく 226

1993年(平成5年)

平成五年は五里霧中 231

不景気風はどこに吹く 233

二人の詩人にふれて 235

最新ペテルブルク事情 239

孔子の〈郷原〉と親鸞の〈善人〉 243

再訪の大連五月的小景 244

続・再訪の大連五月的小景 247

グバイドゥーリナの夜 250

続・グバイドゥーリナの夜 253

平成の夏、木菟軒日記 255

小島憲之『ことばの重み』を読む 259

続・小島憲之『ことばの重み』を読む 262

続々・小島憲之『ことばの重み』を読む 265

柳田国男のまぼろし 268

続・柳田国男のまぼろし 270

続々・柳田国男のまぼろし 273

さらば、激動の'93年よ 277

1994年(平成6年)

半党生ふらふら日乗 280

63年前の新聞を読む 283

続・63年前の新聞を読む 286

一日不読すなわち不便 288

続・一日不読すなわち不便 291

へ人間の死へとへ個人の死へ 293

へ風の郷へで考えたこと 298

続・へ風の郷へで考えたこと 301

死後の世界はあるか 303

〈畏れ〉はなぜ消えたか 308

ドストエフスキーの眼 312

続・ドストエフスキーの眼 315

1995年(平成7年)

'95年のキーワード 318

今年の風邪は手強いぞ 321

阪神大震災の悪夢 323

一九九五年の或る一日 326

明日のことは判らない 329

桃山晴衣わらべうた頌 331

戦後五〇年の節目に 334

〈奇蹟〉は果してあるか 336

石山貴美子写真展のこと 337

新井英一「清河への道」を聴く 338

世紀末ハチャメチャ日乗 339

北の都に春蘭けて

341

桜まだなり奥州路

343

劇説「蓮如」を書いた理由

346

超かもめ「ジョナサン」考

350

全タイトルリスト

363

索引

384

裝訂／三村淳

流されゆく日々（抄）

一九八八～一九九五年

レニングラード冬景色

NO・30153032 '88年2月5日〜3月2日

レニングラードへやってきた。エルミタージュ美術館を見るためである。

この街には前に一度きたことがある。私が新人賞をもらって小説家という肩書きがつく以前のことだ。はつきりは憶えていないが、たぶん三十代に踏みこんでまもなくのことだろう。

そのころ、私はじつに中途半端な状態にいた。東京でのとりとめのないライター稼業にうんざりしたあげく、それまでのすべての仕事を投げだしてリタイアしようという計画中だったのである。

縁のある金沢へでも移住して、古本屋か、ちいさなコーヒーの店でもやってみようか、と本気で考えていたのだ。そして、できれば、いつか一冊の小説集を自費出版でもいいから出してみたいものだと、漠然と思っていた。大学のころ、ほんの端っただけをかじりかけたロシア語も、もういちど勉強してみたい。

そんなとりとめのない気分の中でばんやり暮している時期に、シベリア経由でソ連、北欧の旅をするチャ

ンスが舞いこんできたのである。

そのときのコースを思い出してみよう。

まず横浜からソ連船舶公団の船でナホトカへゆく。バイカル号という名の貨客船だ。そこからはシベリア鉄道でイルクーツクへ。

さらにアエロフロートのターボ・プロペラ機でモスクワへ飛ぶ。モスクワからレニングラードまでは、有名な「赤い矢号」という特急に乗る。

二十数年前のことだから、それがもつとも安く、かつ面白そうなコースだった。レニングラードからは、さらに鉄道で国境を越えてフィンランドへ抜け、北欧をひと回りしたいと考えていた。

そんなふうにしてたどりついたレニングラードは、どことなくとりとめのない印象の街だったように憶えている。

ちょうど白夜の時期だったせいかもしれない。全体に漠として、くっきりした記憶はないのだ。

照りつける午後の陽ざし。青々と豊かなネヴァ河の

流れ。ペトロパヴロフスク寺院の金色の尖塔と、ネフスキ寺院の鐘の音。

そのときは歩きに歩いたものだった。疲れはてて、どこかにカフェでもないかと必死に探したが、みつからなかった。古い建物の並ぶ裏通りには、むっとするアンモニアの臭いが漂っていた。

ドストエフスキーの小説の舞台になったあたりを、深夜まで歩いた。古風なアストリア・ホテルのラウンジで、ピアノストがひっそりピアノを弾いていた。それがセロニアス・モンクの曲だったのでひどく驚いたことを憶えている。それが二十三年前のことだ。だから、私にとっては、レニングラードは全く未知の街と同じことなのである。

はたしてこの二十三年の間に、ロシアはどう変わったろう。かつて私が小説に描いたソ連の印象は、すでに過去のものとなってしまったのだろうか。

昨年あたりから、ゴルバチョフ氏の謳いあげるペレストロイカの声が、しきりにこの列島にまで伝わってくる。

ペレストロイカとはそもそも何か。

辞書をくつてみると、ペレストロイチすることと出てくる。ペレストロイチはペレストラーニヴァチと同じ意味で、周知のとおりへ建て直す・再編成する・改造するなどという言葉である。音楽用語だと

転調することだし、軍隊用語では隊形や編制を変えることをいうらしい。またラジオの波長を変えて、例えばTBSからニッポン放送へ切りかえたりするのもペレストロイカという。

問題はなにをペレストロイカするかということだ。ゴルバチョフ氏は、どうやら本気でソ連の社会構造を「建て直す」つもりらしいが、「日本改造法案」ならぬ「ソ連改造計画」がもし具体的に動きだすとすれば、これはすごい。いかなければそれは「革命の革命」だからである。

ところで、私はこれまでソ連側官僚から、どうやら反ソ的作家とみなされていたようだ。ソ連に招待されて訪ソした文学者の一行に、インツォリストのガイド氏が、「イツキ・ヒロユキのように、ソ連の否定的な一面だけを興味本位に描く作家が——云々」と言ったとか言わないとかいう噂も人づてに聞いている。

そうかと思えば、数年前にR・S氏がレニングラードの大学へ特別講義のためおもむかれたとき、教え子の中に「ぼくはレニングラードのイツキです」と自称するヒッピーふう文学青年がいて面白かった、という葉書を氏からいただいたこともあった。

いずれにせよ、ソ連官僚側の側からは、あまり好ましくない印象をもたれていたらしいことはたしかである。

まあ、そういうことは当面どうでもいいのだ。問題は、今の私にちゃんとビザがあり、二十三年ぶりにレニングラードを訪れる機会ができたことだろう。

私は勇躍して訪ソの身支度をととのえた。なにせマローズ（極寒）のロシアへゆくのだ。靴は自慢のイタリア製ブーツである。内側に毛がぎっしりつまっていて、ソールはレグ・マークのビブラムというポリニ特製のすぐれもの。下着から手袋まで、完全防備。作家はロシアで風邪ひかん、ドント！ のパツクなども買いこんで国営航空の機上の人となった。

成田空港を見るたびに軍用の城塞を連想してしまうのは、私だけだろうか。一国の空の玄関というものは、もうすこし美しく、かつお国柄を感じさせるものであってほしい。現代の建築として眺めても、なかなか要塞監獄のようにしか見えないのは面妖だ。

アエロフロートは、ジェット機である。当然のことだが、昔のツポレフ型ターボ・プロップ機とはちがう。

だが、中にはいった感じは昔のままのような気がした。トイレに行ってみると、懐しい硬質のトイレット・ペーパーに再会できた。感激、というのか、感慨をおぼえずにはいられなかった。二十数年の星霜が、一挙にちぢまったような錯覚をおぼえる。

トイレット・ペーパーなんてものは、硬かろうが黒かろうが、命に別状はないのだ。ことにウサギやヤギ

のような固い排泄物を生産する民族には、シルキー・タッチのペーパーなんぞ無用にちがいない。

棚に、なにやら赤い液体の入ったビンが、ふたのないまま無造作におかれている。すこぶる質実にして剛健な印象。

離陸する際に、ガタンと大きな音を立てて最前列席の折りたたみ式テーブルが前へとび出してきた。あんまり派手な音なので、こっちは隔壁破裂かと思ってどきりとする。

スチュワードスは、決して美人ではないが、すこぶる親切だ。片ことの日本語で、スミマセン、を連発してサービスしてくれる。

ミルクコーヒー、カフェ・オ・レエのことは、ロシア語だとヘコーフェ・ス・マラコムと、昔おぼえた記憶がある。ストマラコムの間をつなげて、スマラコムと、一気に言うのが面白くて、大学時代から三十余年すぎた今でも、その単語だけは記憶に残っているのだ。大事な言葉はすっかり忘れてしまっているというのに、おかしいものである。

コーヒーかティーかときかれたので、そのスマラコムをできるだけ上品に発音してみたら、

「ノー・ソーリー。スミマセン」

と、ニッコリされてしまった。

まもなく左手の雲の上に三角の山容がぼっかり突き

出ているのが見えてきた。どうやら富士山らしい。それからアルプスの山々、つづいて黒部、立山とおぼしき峯々が後方へ飛び過ぎると、まもなく日本海の上空にさしかかる。

しばらく眠る。成田で原稿を書いたので疲れが出たらしい。

目をさますと、雲の切れ間に海岸線が見えた。いよいよシベリアの上空にさしかかったのだ。やはりバイカル号よりジェット機は速い、と、当り前のことに感心する。

へ思いは高く 暮しは低く」とか、そんな有名な文句があったような気がする。

へ暮しは低く 思想は高く」
だったか、なにしろ当節もつとも流行りそうのないスローガンだから、すこぶるはつきりしない。要するに、生活は質素で、知性は高くあるが良し、という提言なのだろう。

私は、最近、こういう考え方にとっても共感するようになった。

食は文化である、という。もっともな話である。食の中に一国の文化伝統と民族の感性が生き続けていることは、反論の余地がない。

だが、グルメとか何とかいって、中学生までがビ

ストロダの茶懷石だのに通ったりする昨今の傾向には、心中ひそかに抵抗をおぼえざるをえない。「どこそこの天プラ屋はカウンターにカレー粉なんぞの小びんを置いているけど、ああいうのは偽せものだよ、ね、パパ」

などという小学生に、父親がわが意をえたりといわんばかりにうなずいて、「そうとも。最近は何を知らない職人がふえてきて困ったもんだ」とか、そんな会話なんぞ聞きたくもないのだ。天プラ屋にカレー粉がおいてあって、なにがおかしいものか。そもそも天プラそのものが外来文化の典型なんだから、エスニックな調味料が新加入したところで文句つける筋合いじゃない。

衣・食・住、それぞれがいかがんな社会は、貧しい文化しか持てない。それは当然だ。しかし、衣・食・住の消費生活の豊かさだけが文化の物差しである、みたいな考えかたには、ちよつと待てよ、と首をひねりたくなってくる。

電力の消費量が文化のバロメーターか。自動車の生産台数が一国の知性の表現か。労働者ぜんぶがフオアグラを食うようになることが大衆社会の成熟か。

私はニエートである。そうは思わない。たとえ食卓の品数は少くとも、家族がつつましく合掌して食事にかかる民族のほうが文化は上だろう。豪華な書齋で凡

作を書く作家もいれば、リング箱を机のかわりに秀作を書く作家もいる。

私はどこか心の片すみで、社会主義国家というものに、そんな理想像を托していたような気がする。だから中国の人民服を馬鹿にしたりはしなかった。中国観光旅行から帰ってきたギャルが、

「信じられる？ 自転車よ。みーんな自転車でイナゴみたいに走ってるのよオ」

などと笑うのを聞けば、むっとしていたものである。暮しが質素でも、思いが高けりやいいじゃないか、と。

世の中というものは、いろんな考え方の人間、いろんな生活様式をもった民族、そういった異なった文化体系が、並列して存在しているのが最もハラショーである。私はそう信じている。

だから、世界中の国々がぜんぶ資本主義の体制に組み込まれてしまうことには反対だ。

もちろんその逆は、もっと反対である。社会主義国家は、他の国々を自分と同じ体制にもつていこうなどと、おせっかいをやくべきではない。同時に資本主義国家も、近隣諸国にそれを強制すべきではない。

わかりきっていることだ。しかし、人間の社会というものは、動物の社会より劣っている部分があつて、そういう棲み分けからハミ出そうとする衝動をもつて

いる。使命感といえいいのか、あるいは自己拡張の欲望というべきか。

そのため世界中どこでも同じシステムにしようという無用な動きが出てくる。資本主義だと社会主義だとを問わず、これはファシズムであり、全体主義であるとしきれない方がない。

どこでも一色、これが一番つまらない世界だ。だから私は中国がアメリカ的生活様式と根本的に異なったライフスタイルや文化の形態を、近代化を進めながらも確立することを期待している。過去の中国の伝統を保持するという受け身のかたちだけでなく、新しい社会主義中国の新しい生活文化様式をうち立てることこそ、偉大なる先進国中国のあるべき姿だろう。もちろんソヴェートもだ。

この際、日本のことは棚にあげて物を言わせていただこうと思う。わが身をふり返って謙虚に反省すれば、もうよその国のことなどあれこれ差し出がましいことなど口になくなってしまふからだ。それでは閑話放談の楽しみというものが無い。だからあえて言いたいことを言わせていただく。

つまり、そういうわけだから私は社会主義国家に、消費的なモノの豊かさを期待はしていないのだ。モノの氾濫する生活様式そのものが、すでに時代おくれの非地球的ライフスタイルだと思つてゐる。